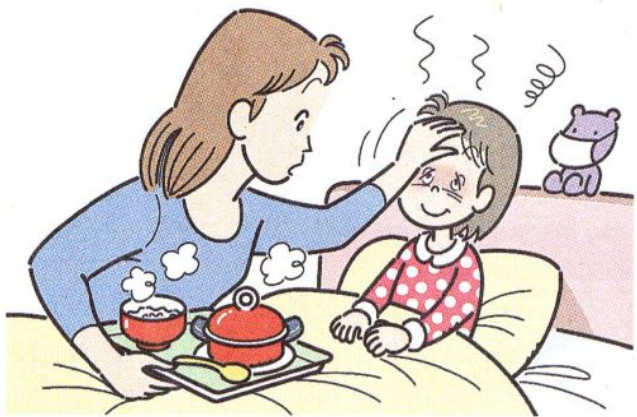


イラスト・平松ひろし



かえ

# 還る家は ありますか

富田富士也

⑦

目の不自由な子が描いた母の絵には、手が何本もあった。お坊さんから、そんな話を聞いたことがあります。広大無辺な母の働きが「千手千眼観音」のように感じられたのでしょうか。

私事で恐縮ですが、私の妻は娘の具合が悪いとき、体温計ならぬ「手温計」を使っていました。額に手を当てられて安らぐ娘の姿に、手間暇かけた「手当て」の意味を考えさせられました。体の痛みや熱は無理でも、心の痛みなら取り除ける。千手千眼とは言わぬまでも、妻もまた「手」と「眼」を併せ持つ「看護師」に見えました。

ところが、こうした子育ての「手間暇」を非効率とみなし、手を焼かせない子を称賛する

## 手間暇かける大切さ

のが今の日本。そこで育った「いい子」は、親の無条件の愛が信じられません。「僕の家族には、かすみがかかっていません」と言ったA君も、その一人。難関大学の合格がほぼ確実だった彼は突然、勉強を放棄して引きこもってしまいました。ひとりっ子で、両親はともに教員でした。

「物心ついたころから、互いに迷惑をかけない」「自立した」家族でいた僕らは、会話にしても気持ちは通じ合わない。誰が何を思っているか分からないし、関心もない。家族でいる必然性が僕にはみえない。たまたま家族でいるような寂しさを解消したくて、あえて「困った子」の役割を引き受けたというのです。

「目を閉じてても、両親が争ったり喜び合ったりする場面が浮かばない。自分でも大人げないと思いますが、10代のうちに、家族みんなで葛藤を乗り越える思い出が欲しいと思っただけです」。彼にはそれが、受験よりも切実な挑戦だったのです。

それから数年。いつ離婚しても困らない「効率的」な関係を続けてきた両親も、引きこもり続けるA君に「手間暇をかけざるを得なくなつて初めて、夫婦でいる意味に気づかされたようです」。

優等生という身を捨てて「還る家」を生み出した彼の決意には、観音様も目を細めることでしょう。

(子ども家庭教育フォーラム代表)